

ご挨拶

第二回日本医療催眠学会大会の開催にあたって一言挨拶と致します。

日本医療催眠学会も発足から2年が経過し、第2回の大会の運びとなりました。

順調に医療催眠の会員同志の啓蒙と研鑽を進めて参りました。医療現場に限らず、広く心と身体を統合してとらえる全人的医療として、催眠はもとより、潜在意識と関連しているヒーリングの手法など幅広い視点から、従来の枠組みを超えた新しい領域からの研究・報告がございます。

EBM(根拠に基づく医療)に留まらず、個人の内面的体験を重視するナラティブなNBIMの視点から「癒しの医療と催眠」をテーマに研究報告や発表から、会員相互の研鑽の大会となることと信じ期待します。



第二回 日本医療催眠学会 大会長
橋元 慶男 (はしもと けいお)
鈴鹿医療科学大学医療福祉学科
臨床心理専攻教授

プログラム

9:15	開場 ～ 受付	
9:30	開会	
9:30～ 9:50	橋元 慶男 大会長	挨拶
9:50～10:30	萩原 優 理事長	挨拶/「疼痛管理のための催眠プログラム」
10:30～11:15	小栗 康平	「解離性障害の治療法」
11:15～12:00	志賀 一雅・杉本 紗季	「ヒプノセラピーにおける脳波観察」
12:00～13:00	・・・昼休み(理事会)・・・	
13:00～13:15	総会	
13:15～13:45	石原 均	「気分障害・不安障害に対する催眠療法と薬物離脱の可能性」
13:45～14:15	大塚 智恵	「催眠療法によるニューロン回路の転位」
14:15～14:45	浦山 恵子	「催眠療法・潜在意識との対話への考察 妹の死を通じて」
14:45～15:00	………休 憩………	
15:00～15:30	西田美樹子・鈴木ひろえ	「セルフヒーリング」
15:30～16:00	谷口はるひ	「ヒプノ・ミュージックセラピー展開の経過報告と事例研究」
16:00～17:15	【特別講演】天外伺朗	
17:30～19:00	懇親会(事前申込)	

連絡先 : 日本医療催眠学会事務局 (イーハトーヴクリニック内)

所在地 : 〒225-0002神奈川県横浜市青葉区美しが丘2-18-9ニューライフビル202

TEL:045-902-7240 FAX:045-482-7620

学会HP : <http://japan-mha.com>

第二回 日本医療催眠学会大会

癒しの医療 催眠のいまこれから



日時 2014年10月12日(日)

会場 KFCビル2階 KFC Hall 2nd
(東京都墨田区横綱1-6-1)

主催 日本医療催眠学会

大会長 橋元 慶男 (はしもと けいお)
鈴鹿医療科学大学 医療福祉学科 臨床心理専攻教授

講演者紹介

疼痛管理のための催眠プログラム

萩原 優（イーハートヴグリニック）

【概要】NGH(National Guild of Hypnotists:米国催眠士協会)がPain Management Certification(疼痛管理の認定)制度を設けており、それを受講する機会を得たので、その内容の概略を紹介します。

【発表内容】疼痛管理に対する催眠をどの様に生かすか、先ず、その理論は脳と痛みの関係を明らかにします。痛みは末梢神経から脊髄を経て、脳で知覚された時に初めて痛みと感ずる。

セッションは4回を一つの単位としている。特に初回のセッションは21のステップからなっている。21ステップは、疼痛の評価と催眠の説明、催眠導入・進化、直接暗示、メタファー、後催眠暗示、解催眠、自己催眠練習、シェアなどからなる。その中には、年齢退行や前世療法などにも必要に応じて行う。慢性疼痛の原因の80％はストレスであり、その為にコルチゾールなどのホルモンのバランスを保つことも必要になる。

【まとめ】催眠は疼痛管理に効果がある。国立衛生研究所に承認されている。医療施設評価認定委員会に推奨されている。患者が希望している。病院が薦めている。公的の、または私的の催眠どちらかを活用する。

催眠はエビデンスに基づいており、変化を生む証明された方法である。故に、疼痛管理のための医療現場への有効な補佐役となる。

USPT(Unification of Subconscious Personalities by Tapping Therapy)

一解離性障害の治療法ー

小栗康平（早稲田通心(のグリック) 田崎美弥子(東邦大学医学部医学科心理学教室) 萩原 優（イーハートヴグリニック）

【概要】解離性同一性障害、内性解離の治療法としてUSPTを考案してから7年が経過した。日本精神神経学会での口演や、精神科治療学誌への論文投稿、USPT研究会の設立など、その普及に努めているつもりだが、未だに施術者は少なく、把握している限りでは10人程度しかいない。手技的には非常にシンプルなUSPTを、決して少ない解離性障害患者の治療に役立てて頂きたい、動画も使用して解説する。

【抄録】母胎に来た時から3歳までの間、人は脳が発達していなくても自分の置かれた環境を把握し、耐え難いストレスに対して解離という別人格を作る方法で対処することができる。一度そのようにして解離した場合、その後の人生においても、困難に直面した際に耐え難いと感じるとその都度別人格を作り出し、成人した頃には多数の別人格が形成されることになる。これが潜在意識下に留まるものを内性解離、顕在意識まで出ているものを解離性同一性障害と呼んでいる。USPTは、両膝を交互にタッピングして別人格を呼び出し、肩をタッピングして別人格をその場で融合・統合する方法である。人格統合には困難から逃げないという勇気が必要になるが、タッピングを用いて過去世・未来世療法を行なうことで自己を洞察させ、その補助とすることもできる。また、USPT中に憑依人格が現れることも稀ではなく、その見極め・対処法も知っておく必要があるので併せて解説する。

ヒブノセラピーにおける脳波観察(2)

志賀一雅(脳力開発研究所)、杉本紗季(ヒブノセラピスト)

【概要】施術者とクライアントの施術中の脳波を連続的に計測し、施術の進行と2人の脳波の変化を観察した。その結果、施術前の閉眼リラックス状態では両者の脳波には10Hzのミッドα波が優勢に観察されるものの特定の関連はみられないが、施術の進行とともに施術者の右脳と左脳と8Hzのスローα波がコヒーレント状態になると、それが引き金となりクライアントの脳波も8Hzのスローα波が強くなり施術者の脳波と共鳴することが観察された。

【目的】施術中の脳波を同時計測してコミュニケーションメカニズムを解明する。

【方法】心理的影響を少なくするため施術者はFp1-A1,Fp2-A2の単極誘導法で左脳と右脳の脳波を計測し、クライアントはFp1-A1の単極誘導法で左脳の脳波を同時計測した。測定はアルファテックIV3台と脳波分析ソフトMinDsensor V(<http://nouhasokutei.jp/>)を用い、測定信頼性は別途臨床脳波計で確認した。実験は施術者2名とクライアント2名。施術前に自律訓練法に基づきリラックス状態の脳波を計測し、施術中の脳波と比較した。

【結果】施術前は両者共に10Hzのミッドα波が優勢だが両者の間に脳波的共鳴は見られなかった。施術に伴い8Hzのスローα波が優勢になり実施者の右脳と左脳との共鳴の頻度が増大し、それと共にクライアントの脳波も8Hzのスローα波が増えシンクロがみられた。

【考察】施術は言語誘導の他に術者の脳波状態がクライアントに強く影響すると思われる。今後さらに対象者数を多くして確認する。

気分障害、不安障害に対する催眠療法と薬物離脱の可能性

石原 均(石原クリニックセラピールームETERNAL COMFORT)

【概要】気分障害、不安障害は催眠療法が適する代表的な心の変動です。うつやパニック障害などが原因で、すでに医療介入が行われているケースが多いことは周知のことですが、こうしたクライアントには、精神科医との密な連携の元で慎重に行われる必要があります。当セラピールームにて催眠療法を行った気分障害、不安障害のクライアントの内、5症例が薬物からの離脱が可能となりましたのでそのアプローチの方法を報告します。

薬物離脱を経験した症例はうつ2例、パニック障害3例。催眠療法は全例が初経験でした。

呼吸法から段階的リラクゼーションを施行。催眠導入後にイメージワークを行い、これをパニック時の待避場所として暗示を与えました。

全例に年齢退行療法を行い、初めに人生最良の時の自分をまず再体験した後に障害に関連した退行療法を行いました。

その後、リラクゼーション・イメージに立ち戻り、うつの2例はGIFT、future pacing、アファメーションを行いました。パニック障害の1例は障害を克服したイメージを想起する練習と自我強化の暗示を、1例は悲嘆療法を、そして1例に最初のパニックを経験した直前に立ち戻り、望まれるイメージを想起し定着させました。全例施術後は症状が消失し、向精神薬が不要になりました。

薬物療法中の気分障害、不安障害に、催眠療法は有用な治療法ですが、癒しるアプローチの組み立てが重要と考えられます。

催眠療法によるニューロン回路の転位

大塚 智恵（心理カウンセリಂಗルーム 和のやすらぎ枝＆ランチ）

【概要】昨年、九州大学名誉教授 井口潔先生との出会いがありました。九州大学の百年講堂で「38億年前の心の成人式」というタイトルの講演会でした。井口教授のお話は、まさに催眠療法の原点とも言える内容でした。生物学的視点からみた大脳辺縁系・大脳新皮質・脳幹・ニューロン回路 この3大構造とニューロンの仕組みを催眠療法でどう活かしていくか？その深い繋がりをお話したいと思います。井口教授のご指導の元、約1年間で「生物学的視点からみた脳と心の仕組み」の講座を修了しました。催眠療法は今現在の悩みからその悩みの原点になる記憶・・・つまり大脳辺縁系の領域に入っていく療法です。ヒト(ホモサピエンス)の特徴と巨大脳 どうして巨大脳になったのか？それは、人間が精神・心で生きるためです。感性を受け持つ古い脳(大脳辺縁系)は0歳から10歳までに完成すると言われていて、生存の為の古い脳とも言われています。多くのクライアントはこの時期にいろんなトラウマを抱えています。

今まで、脳と心の関係の必要性は認識していましたが、生物学視点から催眠療法のお話をさせて頂くとクライアントさんはすんなりと受け入れて頂けます。今、セッション事前面談でもこの部分をしっかりと伝え、講座や講演会でもバワボを使ってお話をさせて頂いています。

今回は、胎児期からのニューロン回路についてもお話をさせて頂こうかと思っています。

催眠療法、潜在意識との対話への考察 妹の死を通じて

浦山重子

【概要】催眠を学ぶ過程で妹の死に出会い、それを通じて人間が自分の潜在意識と対話していくことの重要性について深く思い至りました。今後このことは統合医療の現場にのみならず、あらゆる場面において大事なものとなっていくと感じます。

萩原先生の元で催眠を学び、それを実践していく過程で、催眠とは潜在意識との対話であり、それによって自分との調和や意識の統合が起こることを感じてきました。そのような中で経験した妹の死は私に多くの学びと変容をもたらしました。妹は緩和ケアにより催眠状態になり、私は妹が潜在意識と対話をする様子を目の当たりにし、その様子から死は魂が選んでいるのではないかと気付きました。今まさに多くの人が潜在意識と対話していくことで意識の変容が起こる時代になりつつあるように感じます。それは、自然治癒力に目覚める人や無闇に延命せず望む形で死を迎える人が増えていることで頷けます。見送る家族の意識も変化していくことでしょう。この意識の変容は、私達が肉体を持って生まれ、今ここに生きているという確かな実感を気付かせてくれるものでもあると考えます。この先、催眠によって潜在意識と対話する場と機会が増えることを心から願っています。

セルフヒーリング

西田 美樹子 鈴木 ひろえ

【概要】アメリカのヒプノセラピストであるデビッド・キグリー氏考案によるソマティックヒーリングは、心と身体は一体であるというコンセプトの元に幾つかの技法により催眠下でクライアントさん自身がお自分の潜在意識とつながり、様々な身体からのメッセージに気づいていくというダイナミズムのある手法です。この手技を応用し、個人でも花粉症・肩こり・冷え症などに対して自分で使える様に工夫したので発表致します。

【発表内容】ソマティックヒーリングはおよそ5項目から成り立っており、ゲシュタルト療法やユングの宇宙意識レベルの世界観などを駆使して作られています。この療法の説明の後、一斉誘導にて軽い催眠状態となって頂いた後、各々の免疫細胞を感じたり、身体の赴くままに動いたりする事で不調と感じられている部分を調整する体験をして頂きます。

【まとめ】体調が良い時であれ、不調の時であれ、それはすべて身体からのメッセージと受け取れるのではないのでしょうか。軽い催眠下でご自身の身体と向き合う事で身体に現れた症状の原因を気づく事が出来、不調な部分を調整していく事が可能となります。毎年開催しております花粉症対策のセルフヒーリングにおいても成果を現しておりまして、このような療法はホリスティック医療における今後の期待に値するものと考えられます。

ヒブノ・ミュージックセラピー展開の経過報告と事例研究

谷口はるひ(ヒブノ・ミュージックセラピー協会代表理事)

【概要】第1回大会で発表したドラマジャーニーは世界最古の太鼓による催眠音楽療法＝ヒブノ・ミュージックセラピーという形で展開し、集団催眠療法のみならず個人セッションでも活用が始まった。今回はこの1年間の展開の報告と、個人セッションでの事例研究、従来の催眠療法との違いに着目して発表する。

【内容】ネイティブアメリカンの伝統のドラマジャーニーに深層心理学、催眠療法、音楽療法を融合させたヒブノ・ミュージックセラピーは、太鼓の音による誘導のためクライアントを催眠状態に導きやすいという特徴がある。また集団で行える催眠療法としてコミュニティアプローチも可能である。第1回大会で発表し、その際多くの方からご支持いただいたこのセラピー法を、この1年間体系的にまとめ、ファシリテーター養成コースを開講し、催眠音楽療法として普及させるべくヒブノ・ミュージックセラピー協会を立ち上げ活動を続けてきた。その足取りを、経過報告という形で発表した。

また集団療法のみならず個人セッションとして行った場合のアンケート調査の報告や事例研究、初めての方のためにはドラムの実演など、多方面からこのセラピー法の解説を行う。

特別講演

「集合的一般常識(社会的コアビリーフ)

天外伺朗(ホロボリック・ネットワーク代表)

医療催眠をやっている人なら、日々患者のコア・ビリーフに取り組んでいるでしょう。でも、その中に個人的コア・ビリーフと社会的コア・ビリーフがあることはほとんど知られていません。社会の方を、「集合的一般常識」と名付けました。事実があるから常識があるのではなく、常識があるから事実が起きる、というお話をします。



天外伺朗

萩原 優